

〔天朝無窮曆^六〕さて皇朝にて、中星曆といふを造らしめて、八十二年に一度奏進せしめ給へる事は、何なる曆と云こと詳に記せる物は見ざれど、赤縣州の歴代の曆志を見るに、晉の虞喜といふ者始めて天を以て天と爲し、歳をもて歳と爲し、差を立て、其變を追ひ、五十年に一度を差ふと致へしを、宋の何承天は、百年にして一度を差ふと定め、何承天は、かの元嘉曆の撰者なり、の曆志に、何承天曰、漢代以昏明中星課日所在、日之所在雖不可見、月盈則蝕、必當其衝、以月推日、躔次可知、捨易而役心於難、臣所不解也、堯典云、日永星火、以正仲夏、今季夏則蝕、火中又宵、中星虛以殷、中秋、今季秋則虛中、爾來二千七百餘年、以中星檢之、所差二十七、八度、則堯時冬、然則隋の劉焯、至日在須女、十度、左右也、と有るを思へば、此人も堯典の中星は、信けざりけり、唐の一行が大衍曆に至り、その二家の中數を取りて、七十五年に一度を差ふと定めたりしを、唐の一行が大衍曆に至りて、八十三年に一度を差ふと定めたる由なり、猶是らの外に、其曆志どもに、一度を差ふ年數を、六十六年、或は六十七年、或は六十八年、或は七十八年、或は四十年、或は百八十六年など云ひて、互に相是非しつ、紛々聚訟、すべて讀むに堪ざる迂說等なる中に、曆家自北齊張子信始知歲法、以古曆推之、凡八十餘年、差一度、月令曰、在某宿、比堯時、則已差矣、云々と云ひ、日右轉、星左轉、約八十年、差一度、云々と云へる說あり、一行が八十三年といふ說は、是を折衷して得たる測量なり、然れば皇朝の中星曆は、此方の博士の、そを再折衷して、八十二年に一度の差と測量して、歲月の曆とは別に、是曆を奏進せるにぞ有べき、然れども、是なほ未その中分を測量し得ざる物なり、太昊古曆傳に出せる、近世の測量を見て知るべし、

假名曆

〔玉勝間^八〕かなごよみ

同拾遺 物語に、かな曆といふことあり、むかしは眞名と假字との曆有しにや、さて又曆に、神佛によしといふ日あり、今の曆本に、神よしとゑるせるは、是なるべし、又、かん日、くゑ日など、日のよきあしきをゑるせることも見えたり、

〔宇治拾遺物語^五〕これも今はむかし、ある人のもとになま女房のありけるが、人に紙こひて、そこなりけるわかき僧に、かな曆かきてたべといひければ、僧やすき事といひてかきたりけり、はじめつかたはうるはしく、かみほとけによし、かん日、くゑ日などかきたりけるが、やうくすゑざ